

「わたしの魂は主をあがめます」

詩篇 第34章1節～10節
ルカによる福音書 第1章39節～56節

説教 岡村 恒牧師

「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救主なる神をたたえます。」(ルカによる福音書 1章46～47節) 主の母マリヤの口をついて出たこの讃美歌はマグニフィカートと呼ばれます。

あなたは救い主を生む、そう言われたマリヤは当初、受け入れることができませんでした。しかし天使によって〈しるし〉が告げられます。あなたの年若い親戚のエリサベツはもう身ごもっている。神にはできないことはない。「マリヤは立って、大急ぎで山里へむかいユダの町に行き、ザカリヤの家にはいってエリサベツにあいさつした。エリサベツがマリヤのあいさつを聞いたとき、その子が胎内でおどった。」(39～41節) エリサベツの子は主イエスに少し先んじて生まれ、バプテスマのヨハネとして主イエスの伝道の準備をすることになります。

マリヤの讃歌はマリヤのオリジナルの歌ではありません。旧約聖書の詩編で繰り返し聞き、歌ってきたマリヤの中から溢れ出てきたような讃美歌です。マグニフィカートと言うのは大きくするという意味があります。身近な言葉にもなっています。拡大鏡は英語でマグネファイニングラス、情報の単位MB(メガバイト)、ハンバーグを食べに行ってもメガと言うのは普通に耳にします。通常のサイズを遥かに超えた大きさを持つと言うのがメガと言う言葉です。神は大きい、私たち人間が想像できる大きさを遥かに超えて、主は大いなる方だ。これがマリヤの口をついて出た讃美歌の一部です。

マリヤはいったいどんな思いをしてザカリヤの家まで、やってきたのでしょうか。いきなり天使の来訪を受け、救い主を宿していると宣告をされ、かろうじて御告げを受け止めて、そして山里を歩いたのです。当時のユダヤの世界では、結婚前の妊娠は赦されざる罪です。しかしこの時マリヤは、聖霊に導かれ、魂の奥底から、神は大いなる方だと言わずにはおられない。これがこの時のマリヤの信仰告白です。

受胎告知を受けた時にマリヤは、「お言葉どおりこの身に成りますように。」(38節)「Let it be」そうお答えをして、御使いガブリエルはマリヤの元を去りました。この時の言葉はいろんな場面で引用され、誤解をされて用いられてきた言葉の1つです。ただの受身で、ギヴアップするようにして、受け入れが

たい神の計画を受容たのではない。マリヤは神のなさり様を無力に受け入れたのではありませんでした。積極的に神の働きに関わっていく生き方です。

讃美歌は祈りであり証です。神がどれほど大いなる方かを証言する、それも讃美歌の働きです。マリヤは、その救いの計画のために人生全体を使って下さることを喜んで、神を讃美し始めます。神の計画が、本当のこととなるために、自分のお腹に救い主が宿っている。神が人間の救いのために神のひとり子を地上に送って下さった。そのことをマリヤの讃美歌は証しています。

神がなさることは私たちの思いや予想を遥かに超えていて大きい。マリヤの讃美歌は今日も私たちにそう証をします。クリスマスに私たちは、悔い改めの祈りを祈りながら、「主よ来て下さい。」と声を合わせて祈っています。世の終わりが来て、主イエスがもう1度地上に来られるとき、自分自身の小ささを思い知るようになります。神の栄光が私たちを照らすようになる時、本来誰1人そこに立ちえないので、同時に神の憐みの大きさを確認します。

本来、神の名を呼ぶことも、神を本当の意味で知ること赦されない私たちです。神が御心を向け、主イエスによる救いを成就して下さいました。誰でも、主イエスが救い主であることを信じて受け入れ、歩み始めるなら、その歩みは、神の救いの計画に積極的に参与し、用いられる人生を歩むようになります。神を讃美し、神を証し、終わりの日を心から待ち望んで地上を歩むようになります。主イエスの再臨を待ち望むこのアドベントに私たちは声を高く大きく上げて、神の大いなることを讃美したいと思えます。あの日マリヤの口をついて出た喜びが、私たち1人1人の中にも神によって注がれているからです。

主イエスが来て下さり、私たちのために死んで、罪の赦しを成就して下さいましたからには、主イエスが墓から引き上げられ、今も生きておられ、私たちのために場所を用意し、やがて再び来て私たちをお迎え下さる。この約束が確かなので、私たちは繰り返し、主の恵み深いことを味わい知りながら、地上を歩むことが赦されています。主は大いなるかな。主の憐みは深く永久に変わることはありません。

(記 説教要約奉仕者)